

沖縄歴史の散歩道

湧き水を歩く①

本誌上及び沖縄総合事務局ウェブサイト「オキナワンパールズ」にて
歴史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を紹介します。

<https://www.okinawan-pearls.go.jp/>



大謝名メーヌカー

沖縄の代表的な湧き水といえば垣花樋川（ヒージャー）や金武大川（ウッカガー）。垣花樋川は南城市玉城にある湧き水で、垣花集落南側の急斜面の中腹に位置します。集落から長い石畳道を降りていくと洞窟状



垣花樋川(カキノハナヒージャー)

沖縄の歴史のなかで人々の命を支えたのが「カー」や「ヒージャー」と呼ばれた湧き水です。小さな島の沖縄では大きな河川は形成されず、主な水源としては利用されませんでした。が、各地には石灰岩の層と泥岩層の間から湧き出る井泉があり、これらが生活で利用されてきました。多孔質の石灰岩は雨水を浸透し、水を通さない泥岩層にあたり地表に流れ出ます。石灰岩がいわば天然のろ過装置の役割を果たし、清水となつて人々を潤したのです。

湧き水の有無は沖縄の歴史の動向にも大きく影響したとみられます。宜野湾市の大山付近は田芋の産地として知られていますが、実は宜野湾は森の川をはじめ湧き水が100か所以上もある場所で、こうした湧き水が農業に利用されています。宜野湾の地形は内陸部に石灰岩

になった場所から水が出ていて、樋によつて地表へと導かれています。豊富な水量を誇り、付近はため池がつくられ、夏は多くの子どもたちで賑わう場所です。金武町の並里区にある金武大川も1日の湧水量千トンを超える湧き水で、その水は農業用水としても利用され、付近の米や田芋栽培に役立てられています。



金武大川(ウッカガー)

上里 隆史

(うえざと・たかし)



琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』（福音館書店、2020年）、『海の王国・琉球』（ポニーインク、2018年）、『マンガ沖縄・琉球の歴史』（河出書房新社、2016年）、『尚氏と首里城』（吉川弘文館、2015年）など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「プラタモリ」案内人などメディアでも活躍。

の台地があり、海岸付近は泥岩層の低地となっています。この台地と低地の間に無数の湧き水が形成されたのです。かつては水はけのよい石灰岩の台地で畑作が行われ、湧き水を利用して海岸の低地で稲作が行われました。琉球の時代、宜野湾は屈指の生産高を誇り、琉球の石高8万石に対し、宜野湾の大謝名の村（現在の大謝名）だけで1千石余りを占めるほどです。なお宜野湾はかつて「浦添」の一部でした。浦添は「うらおそい（浦々を支配する地）」と呼ばれ、何人もの王を輩出した琉球王朝発祥の地。そのパワーの源泉は湧き水から作られた肥沃な土地にあったといえるでしょう。